

複合文化学通信

第10号 (2007年8月10日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部

複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘 編集補佐 / 古川誠之)

みなさん、テストとレポートも終わり、
いよいよ大学生活はじめての夏休みですね。

今回も次号につづいて、前期の授業に関して、
実際に授業を受けたみなさんの意見や感想と
授業を行った教員の反省や考察を紹介します。

夏休みには、

おおいに遊び、おおいに活動して経験値を上げてください。

また、夏休みでないと

読めないような本もあります。

身体だけでなく脳の経験知も適宜アップをはかってください。

今後も引きつづき授業に関して何か意見や要望があれば、編集室 (culture@edu.waseda.ac.jp)

までメールをください。個別にお答えするほか、「通信」でも紹介します。

匿名希望の場合は、「匿名希望」としてください。

また、そうした意見や要望を出されたことで、本人が不利益になることのないよう配慮します。

「ここはいいけど、こんな点が不満」

以下に前期の授業全体について寄せられた意見を紹介します。

みなさんも「そうだ」と思う点があるのでは？ あるいは「これはちがうんじゃない」という反論があるかもしれません。

複合文化学という学問自体、新たな〈知〉の創造であり、これまでにないいい点もあれば、わかりづらい点、理念とかけ離れている部分もあると思います。

いい点をよりいいものにし、問題点を改善していくためにも、学生と教員との率直な意見交流がぜひとも必要です。

いや、そのような教員から学生への一方的な知の伝授ではない、相互的なコミュニケーションによる新たな知の創出という教育モデルの確定こそが、まさに複合文化学の目指すもののひとつなのです。またそれだからこそ、複合文化学科は「教育・総合科学学術院」「教育学部」に設置されているのです。

複合文化学科は新しい学科です。まず、みなさんが積極的に発言して、それに教員集団が応えていくことで、この学科をより学びやすい〈わたしたちの学科〉にし、新たな知の領域を切りひらいていきましょう。

その1

まず、開拓地や建築物における各教員にレポートを提出するというやり方は、とても良いと思う。長く文章を書いたことのない人間にとっては文章を書くという面が鍛えられるし、いくつもレポートを書いていくプロセスの中で論理的思考力の向上ができるという面でも、とても有意義であると思う。僕自身、レポートそれ自体を書くことはそこまで苦ではなく、他の学生がどうだかは皆無だが、僕としてはむしろ楽しんで書いていると言える。自分の考えを文章化して、色々と試行錯誤するというのはなかなか面白い作業だと思う。

しかし、この学科は何を終着点として学問をしているのか、よく分からない部分がある。シラバスを読んでみてもいまいちピンとこないが、とりあえずその科目を取ってみると、思った以上に興味がない内容だったということもあった。オマケにその興味のない内容のレポートを書かされる。領域が抽象的で形而上学的なものもあれば、逆に具体的で実用的なものもあったりと、自分の生活を知的にしていけるにはもってこいだとは思いますが、それが苦になってしまふ学生がいるのもまた事実である。慣れるにこしたことはないとは思いますが……。

その2

ゼミを1年次から取れるので、発表形式の授業に慣れることができたのが良かったです。同じ学科の友達と意見交換をする貴重な機会でした。

建築物や開拓地のレポートの多さには参りました。でもテストが少ないのは嬉しいです。

映画やドラマを使った講義が多く、前期の間だけでたくさん作品を見ることができたと思います。

複合文化学の授業は、聞いたことをそのまま覚えるという授業が少なく、自分の中で発展させることが重要だと感じました。

その3

すでに指摘されているように、レポートの時期が重なってしまい、前期はかなり苦しかったです。しかし、授業自体は、ひとつの講義で三人の先生のお話が聞けて、とても有効的な授業だったと思います。それぞれの先生方が、色々な分野の話や、講義の形をとっているの、とても面白かつ

たです。

ただ、説明がありましたが、建築物や開拓地という意味がいまいちわかりづらかったです。建築物については、説明と授業の内容で大体意味がわかりました。しかし、開拓地については、授業の内容と講義の大きな題目である開拓地というのが結びつきませんでした。

特に、建築物と開拓地の違いもわかりにくかったです。先生がすべてバラバラなので、違うといえば違うのですが、違いすぎると共通性が見えなかったりしました。唯一、原先生の講義は、建築物も開拓地も受けましたが、授業の内容についてはとても良かったと思います。しかし、建築物と開拓地でどう違うのかがわかりませんでした。それとも、違いは特になのでしょうか？

ゼミについては、先生方が発表の仕方やレジュメの作り方を丁寧に教えてくださったので、とてもわかりやすかったです。

初めてで緊張しましたが、いい経験が出来たと思います。少人数というのは、雰囲気作りも発表もやりやすくしてくれたのでよかったです。この経験が、これからの大学生活に役立つようにしたいです。

その4

複合文化学科は授業の多様性に富んでいてとても魅力的な学科です。がしかし複数人数の先生方がそれぞれ詳しい文化系の分野を一つの授業で《学問的》に学生に向かって講義を行うというのはとてもたいへんな事と思います。私の知識の少ないことや、理解力の低いことも確かにあるのですが、複合文化学において授業に一貫性が見出せないがため、講義後に自分が一体何を《勉強》したのかをしっかりと述べるのが困難であるように思えます。

この件は自分の経験からではないので客観的な意見になりますが確かに複合文化学は各教員に一つのレポートをとる形であるのでもしもはじめに先生方が勧めておられましたように最大数の講義を取ってしましますと、レポートがどれも同じ時期に多数重なって一つ一つにかけける時間というものが限られてしまい煩雑な仕上がりのもを複数提出してしまい、学問的にも理解度の低いままに終わってしまう気がします。その他せっかく早稲田大学に所属しているのであれば、数々のオープン授業やテーマカレッジといった学部外提供の授業も自分のためにいくつか取って真剣に学びたいところです。オープン教育科目はやはりレポートでの成績が大きいと思いますのでこちらとの兼ね合いもむずかしくなってしまうと思いました。

応答

すでにお知らせしたように、複合文化学関連の選択必修となっている専門科目を、教員の勤めるとおりたくさん履修すると、それらがすべて複数の教員（基本的に3人の教員）によるリレー講義であるため、前期の複数回にわたって同じ時期にレポートが集中して負担が大きいという点については、改善にむけて学科全体ですでに検討に入っています。

来年度からは、授業の性格を考えながら、少し負担を軽くする方向で検討しています。

ただ、重要な点をちょっと説明しておきたいと思います。それは、わたしたちがただちにみなさんの負担を軽くすることだけを考えて、このような検討をおこなっているわけではないということです。

さきほど「授業の性格を考えながら」といった点が、じつはポイントです。

というのも、「複合文化学の建築物」という講義の目的は、みなさんにある専門的な知識を伝授することではないからです。

では、いったいなにがこの講義の目的なのでしょう。

それは、複合文化学的なアプローチで、あるテーマを分析すると「こんなことが見えてくるんだ」、「こんなふうに見ることもできるんだ」とみんなに納得してもらうこと、あるいは「こんなテーマも研究の対象になるんだ」「こんな材料を取りあげてもいいんだ」とみなさんに驚いてもらうことです。一言でいえば「みなさんをインスパイアすること」、これが「複合文化学の建築物」の目的なのです。

ですから、その目的が達せられるのであれば、わたしたちは「全体で3本のレポートを提出する」というやり方以外の方法で、評価を行うことも可能だと考えています。

同じく選択必修科目の「複合文化学テーマ演習」は、1年次の少人数ゼミで、おおむね好評のようですが、やはり複数の演習をとると発表が重なり、負担が大きいと同時に、それぞれの演習での学習がうすいものになりかねないという危惧があります。

したがって、来年度からは前期後期各1科目の履修を基本とする予定です。最初の登録（1次登録）では、前期1演習、後期1演習に登録してもらい、空きがあり、どうしても他の演習がとりたい場合、各期の2科目目の履修を認めることになります。

この「複合文化学テーマ演習」は、「複合文化学の建築物」同様、概論でも基礎でもなく、ある具体的な文化現象について、多面的に分析する専門的な（つまり複合文化学的な）学習のための授業です。ただし、ここでは「建築物」で教員がおこなったことを、みなさんが教員に助言されながらみずからおこなう点がことになります。

この演習のもひとつのねらい、それはあるテーマについて、論理的に考えてレジュメを作成し、口頭のプレゼンテーションをおこない、それをレポートにまとめる力を身につけてもらうことです。

ですから、知識の伝授を目的にしていなくても、「複合文化学テーマ演習」では、レポート提出を評価の対象からはずすことはできません。

「複合文化学の開拓地」は、自然科学や言語論といった、複合文化学がこれからあつかうべき分野、他の学問と協力して取り組むべきテーマがあつかわれる授業です。

ただ、この授業は、複合文化学科の前身となった学際コースの科目であった関係上、基本的に他の学科専修の教員が担当しており、まだまだ多面的なアプローチという点で改善の余地があるとわたしたちも思っています。

みなさん、これで少しは各授業の意図についてわかっていただけたでしょうか。

1年次の専門の授業の大きな目標、それはさまざまな文化現象にふれ、それを多面的多角的に分析することの面白さを感じてもらうことなのです。

でも「専門的な知識は？」

大丈夫です。

「リレー講義ばかりで、何を学んだかはっきりしない」という不安や批判についても同じです。

まず、1年の選択必修科目の主眼が、知識の伝授でなく、「具体的な文化現象を複合文化学的に考察したらどうなるか」ということをみなさんに実感してもらう点にあることを、もう一度確認しておきましょう。

それから、2年次以降には、いわゆるより専門的な知識を身につけるための科目群（それぞれの教員が自分の専門分野を半期にわたって講義する20科目を越える「複合文化学特論」、文化現象の分析に必要不可欠な理論的ツールを学ぶ「複合文化学の道具箱」、さらにはそうした理論についていっそう深く学習する「複合文化学の組立方」）があるからです。

まったく不安になることはありません。みなさんが「複合文化学の建築物」や「複合文化学テーマ演習」で、「ふー

ん」「へー」と思ったことが、今後、〈専門的に〉(より〈複合文化学的に〉)展開されていくはずです。

もちろん、このような原則にのっとりながら、まだまだ改善すべき点はいくつもあると思います。

たとえば、「複合文化学の建築物」は、副題にも明示された次のような大きなテーマにそって3人の教員がそれぞれのフィールドから複合文化学的な考察を展開するものです。

「Ⅰ 知覚のメタモルフォーゼー聞こえ方や見え方、味わい方や感じ方にも歴史がある」「Ⅱ 他者たちのシーンー他人と他者ってどう違うの?ー」「Ⅲ 文化というハイブリッドー〈文化〉は雑多のものから引き算して作られるー」「Ⅳ 自然という発明(本来は「自然というトポス」)ー人工化されていない自然はどこにあるー」

3人の教員による考察が「全然ちがう」のは当然です。かえって同じだったら複合文化学的に問題です。ちがって当たり前、フィールドと方法論を変えれば、同じテーマでも見えてくるものがちがうというのが複合文化学のスタンスだからです。

ただ、まだ初年度の授業ということもあり、講義によっては、内容についてもう少しすりあわせてほうがいい場合がみられることも事実のようです。それは今後の検討課題であると思っています。教員のあいだでより領域横断性と複合性をたしかなものにするために。

こんな授業、あんな科目

今回は、まずは基幹となる必修科目「複合文化学の建築物Ⅱ 他者たちのシーンー他人と他者ってどう違うの?ー」についてです。

複合文化学の建築物Ⅱ

他者たちのシーン(木曜3限)

神尾達之、渡辺芳敬、野谷文昭 担当

「建築物Ⅱ 他者のシーン」は今期はじめての試みで、学生諸君以上に、僕自身のほうがプレッシャーは大きかったような気がします。なによりも、他者というテーマと建築物という講義名がすんなり結びつかなかったからです。

講義では、なんとか新味を出すべく、他者をひろく自己以外のものと捉え、「生の発見装置」という観点から、オペラ、絵画、映画、ミュージカルを扱いながら、エンターテインメントの可能性について講義しました。とはいえ、なかなか飛べなかった! 学生諸君もいたようで、その点はまます反省しています。やはり、もうすこし、自己と他者との相関に絞って、話を展開した方がよかったのかもしれない。感想カードにも、他者のイメージがうまく結べない、という意見が最後まで見られました。もちろんその反面、こちらの熱意にほだされ! ミュージカルに目ざめてくれた学生諸君も結構いたのですが。

というわけで、レポートは好きなもの・好きなことについて自由に語ってもらおうと思い、1) 講義に対する異論・反論 2) 好きな人物や事象の圧倒的魅力 3) 他者とのコミュニケーションについて具体的に論ずることの三択としました。

一番多かったのは、携帯電話や車内化粧あるいはブログを通して考える他者論。間接的コミュニケーションの拡大が他者喪失につながっているのでは、というみなさんの共通認識に正直ほっとしました。なぜいま他者かといえば、文字通り目の前の他者が見えなくなっているからです。携帯という他者に占有されているにもかかわらずー。

ついで、取り上げられた人物で多かったのは(授業で扱ったゴーギャン、ゴッダール以外では)宮崎駿、松本人志、中田英寿の三人でした。芸人やスポーツ選手は、やはりいつの世もカリスマ的存在のようです。そのほか、「岡山」「フェルマーの最終定理」「右側をあけるのは常識か」「自然農」等々、思いもよらないテーマもあり、150人という数の多さを改めて感じざるを得ませんでした。

レポートは、発想、構成、形式要件の三点から評価することにしましたが、たんなる紹介に終わっているものや、論旨の不明瞭なものなど、こちらの要求にきちんと答えていないものが多々ありました。

それ以上に残念だったのは、ほぼ同内容のレポートが出てきたこと。魔がさしたとしかいいようがありませんが、かえすがえすも残念でした。

教員はレポートなんてきちんと見ているはずがないという醒めきった意識のあらわれでしょうか。ちゃんと見えていますよ! レポートを甘く見てはいけません! この声がみなさん一人ひとりに届きますようー。

(渡辺芳敬)

さて、演習科目「複合文化学テーマ演習」です。1年からの専門ゼミ、これも複合文化学科の特色です。

複合文化学テーマ演習Ⅰ

映画のなかで飲食はどう表現されているか（金曜4限）

福田育弘 担当

飲食場面がきわめて重要な役割をはたす東西の映画をいくつか見て（今年度は8本の映画を見ました）、それについて各人が1回発表するという演習です。人数の関係（24人が履修）で、1回で3人発表という回もありましたが、発表はどれもかなり内容の濃いもので、わたしにもおおいに刺激になりました。これがゼミの醍醐味ですね（この「醍醐」[だいご]って奈良時代の最高級のチーズだってみなさん知ってました?）。

実際の授業は、事前に映画を見て感想を Course N@vi に書き込む、毎回の発表と議論、発表の感想を Course N@vi に書き込むという形で進行しました。これって慣れるとできなくはないのですが、以下の意見があるように結構面倒です。でも、ちゃんとやっていると、これも意見にあるようにかなり力になることも事実です。

その Course N@vi によせられた前期全体の感想をいくつか紹介します（紹介できなかった人、ゴメン!）。

意見によってある比率で教員へのリップサービスという味覚増進の添加物が含有されていますが、それでもまずまずこの演習の雰囲気と内容のレベルを伝えていると思います。

正直なところ、毎回映画を見て感想を書く負担は結構大きかったのですが（毎回感想かけてませんけど；笑）、こんなペースで映画をみて、分析するなんてなかなかない経験だったと思います。4月と比べてかなり分析力がついた気がしますし、映画の見方が変わりました。飲食についてだけでなく、映画における表現方法全体も学べるお得な演習ですね！笑 やっとペースもつかめてきたところだったので、通年ならよかったのに…と残念に思っています。半期間、とても楽しかったです。（TK）

作業が多く、大変だったかもしれませんが、前期の授業では1番楽しかったです。それに学んだことも1番多かったと思います。ストーリーを追うだけではない、映画の見方、視点。飲食のプラス部分、マイナス部分。プレゼンのやり方、工夫。などなど。特にプレゼンのテクニックなどは、後期からも活かしていきたいです。（TH）

正直、すごく大変な授業でした。前もって映画を見て感想を書かなくてははいけないし、さらに発表の感想を書かなくてははいけないし・・・。

演習のテーマを見て授業で映画を見られると思っていたので『失敗したあ〜!』と思っていました（笑）！でも、この作業で自分なりの分析をし、また違った分析をすることで新たな見解が生まれました。

普段何気なくしている飲食を、私たちにとって身近なものである映画を通して考えることで様々な意味を持つものだと知りました。私たちは飲食の持つプラス面だけ意識して生きているかもしれませんが、そうではなく私たちが口にしているものは何らかの命を奪ったということをおぼえてはいけないと思いました。小さい頃に、食べ物を粗末にしてはいけないと教えられてきたはずですが、大人になるにつれて私たち人間はそんな当たり前の事すら忘れていく気がします。食べ物に対する感謝の気持ち、世界には飢えで苦しんでいる人がいて自分たちは食べ物に困っていないという事実を常に頭に入れておきたいです。また、テーマは飲食でしたが、映画の中の色や空間、人間模様などの分析をしてきたことで、様々な角度から物事を考察できるようになった気がします。大変だったけど収穫のあった授業でした。（MT）

とても楽しく、ためになったゼミでした。いつも書いているレポートはどんな評価がされているか全く伝わりませんが、ゼミでは自分のした発表にレスポンスがちゃんとあるということが刺激になりました。

ひとつ残念だったのは、自分の発表が自分の思い通りにいかなかったことです。章ごとにまとめをつけるという根本的なことができなかったことも残念すぎです。今後はこのようなことも注意していきたいと思います。またレジュメを作ってから、どのようにそれを発表するかということにも気を配って行きたいです。レポートがんばります。（EM）

他のどの授業よりも、「複合文化」というものが一番よく理解できた気がします。コースナビでの書き込みが多くて大変でしたが（しょっちゅう締め切りを過ぎてしまってますいません・・・!）それだけ自分の考えをまとめる機会が多くてとてもいい経験になりました。また、みんなの発表を聞くことによって発表そのもののやり方（レジュメ、パワポ、司会など）もとても勉強になったし、ひとつの映画を、しかもテーマを絞って見て他の人の意見を聞く機会なんて今まで無かったので、新鮮な発見がたくさんありました。

みんなの仲も凄く良かったし、終わっちゃうのがさみ

しいです。またぜひ、「食ゼミ同窓会」でもやりましよう（笑）（ＹＹ）

（……）食欲という人間と切っても切れないものと絡む飲食だからこそ、映画の中、ほんのワンシーンでも意味をもち、例えば家族であれば食卓に家族の関係が見えてきたりするのだなと思います。このゼミに入って、たった半年間だったけど、複合文化学科の「文化を多面的に分析する」ことの面白さ、奥深さを実感できました。みんなの意見をきくことでさまざまな視点から見るができるようになった気がします。（ＭＮ）

映画をこんなにもまじまじと見たのは初めてだったので、とても新鮮でした。今後映画を見るときはメインストーリーだけでなく、そのたのサブ的な場面にも注意を向けていければ、もっと視野が広まると思いました。飲食と映画表象ということで、最初は少々とまどったこともありましたが、みんな自分の発表に一生懸命取り組んでいたと思うし、自分自身もこの演習を通じて得たものは大きかったです。そしてなによりも、このメンバーでできてよかったと思いました。本当に楽しい演習でした！ 半期なんてもったいないです。（ＮＴ）

今までに観たこともないような映画がほとんどで、理解に苦しんだり、単純に面白かったりと色々でした。理解に苦しんだ映画は発表の後で納得出来たり、何気なく観ていた映画は発表を聞いて驚かされたりと、全体的に起伏があって面白かったです。自分が担当した映画には何となく愛着が湧きました。発表やその為の準備、その後の先生や寺地さんのコメントは今後確実に必要なスキルなので単純に勉強になったと思います。（ＹＫ）

このゼミが終わってしまうのがすごく寂しいです！ こんなにも食べること、飲むことについて考えた半年間は今までにありませんでした。タンポポの食欲をそそるような映画から始まり、最も食欲をなくす映画に終わりましたね。同じフランス料理の食卓でも、『パリのレストラン』で皆で楽しみながら食べる食事シーンと、『コックと〜』で銃を向けられながら１人で人肉を食べさせられるシーンでは全く違った空間でした。食のプラスとマイナスの両極端を見た気がします。（……）このゼミでは初めて発表形式を体験し、今後の大学生活にも役立つことが満載だったと思います。皆の発表やレジュメの作り方はとても参考になったし、様々な分析の仕方があることに気づかされました。自分以外の考え方を聞

くことのおもしろさがわかりました。また、結末のはっきりしないような映画の意図を分析する楽しさも知りました。このゼミが終わってもたくさん映画を見たいなあと思います！ このゼミが通年だったらいいのになあという気持ちでいっぱいです。（ＫＩ）

実は僕、福田先生の演習に参加するまで、食にはあまり関心がありませんでした。僕の家族は皆小食で、食に関しては驚くほど質素な生活を送っています。なんと夕食をご飯と梅干しで済ましてしまうことも、間々あるほどです。（苦笑）この演習を選択した動機も「福田先生ってガイダンスで話してたけど、良さそうな先生だなあ」と思ったからでした。

しかし、演習が始まってから、食に対する態度が大きく変わりました。具体的に挙げてみますと

- ①食事をしている最中に「今、自分がしている飲食行為はどういう意味があるのだろう」と考えるようになった。
- ②３食まともなものを食べるようになった。
- ③栄養バランスを気にして食事を摂るようになった。

といった変化がありました。

この演習では、映画を通して、普段考えもしない、飲食の様々な意味（特に負の部分を知ったときは衝撃でした）を考えそして何よりも、飲食が人間にとっていかに重要であるかを深く知ることができました。食に無関心であった僕が、大きく変わったのもこの演習のおかげだと思っています。（ＨＫ）

複合文化学テーマ演習Ⅰ 6

〈歌〉に込められた思いを読み解くー短歌からＪポップまでー

（水曜４限）

高橋良行 担当

どんなに忙しい日々を送っている人でも、どんなに冷徹に生きている者でも、心の中に好きな詩句や楽曲のひとつも思い浮かばない人はいないでしょう。私たちが生きていく上で、詩歌的言語は、一見無駄なようですが、実はなくてはならないものです。

この演習は、そうした自分の好きな詩歌や楽曲、あるいはそれらと関連するテーマについて、その魅力や興味の在りか（根源）を、先行文献を援用しつつ、自分の言葉で分析的に言語化してみようというものです。

学期の前半は、広い意味での日本語詩歌の異同や歴史性、重層性を理解するために、次のような方法で進めました。短歌・俳句・漢詩・唱歌・演歌・Ｊポップなどについて書かれた代表的な文献７種を、ほぼ２名ずつで

分担し、各担当者がレジュメを全員に配布した上で、課題文献の要約・批判的分析などを発表（20分）、それに対して他の参加者が各自の感想や意見を述べたり、質問などをするというものです（10分）。こうした方法は、担当者以外の受講者も全員が課題文献を当日までにかならず読んでおく、ということが前提となっています。

後半は、前半での授業をふまえ、原則として1回の授業で3名ずつ、各自の好きな作品やテーマについて同様の方法で発表、質疑応答をしてもらいました。受講者には、この発表を生かして、最終的にレポート（4000字）にまとめ、7月末に提出という課題をあてました。

半期の授業を終えての感想ですが、教師としては、短歌や俳句など各ジャンルをあつかう者が、ある程度平均的にいるかと予想していました。しかし、実際にはほとんどの者がJポップでした。楽曲の力はやはり大きいですね。

授業の問題点としては、発表前夜のドタキャンメールが2、3あったこと、課題文献を読んでいないものが毎回何名かいたこと、これと関連して、多くの場合、質疑応答が思いつきの通り一遍なものとなった感はありません。た

しかに、毎週1冊必ず入手して、当日までに読んでおくというのは、新入生の前期ということを見ると結構大変なこととは思いますが、残念でした。また、後半の授業では各人が発表する前に、とりあげる楽曲を皆で聴いて共有したかったのですが、時間的ゆとりがありませんでした。参考文献の扱い方やレポートの書き方などについて、教師が説明する時間も不十分でした。課題図書の数や発表方法、時間配分など、今後の検討が必要です。

一方、個々の優劣は別として言えば、各担当者の発表テーマやレポートは、歌詞論・歌手論・ジャンル論ありとそれぞれに個性的で多様であり、おたがいに啓発されることが多々ありました。また、受講者の中に韓国の留学生がいて、折々にKポップとJポップとの違いを聞くことができたのも収穫でした。

ともあれ、楽曲を広義の詩歌論として考えることは未開の領域ともいえますので、今後、方法論的なものもふくめて、その内実を高めていく必要があります。

（高橋良行）

fukugou-bunka@eiga

上海から来た女 1948年アメリカ映画 オースン・ウェルズ監督

ウェルズは「市民ケーン」や「オセロ」など一連のシェイクスピアの映画化作品で、映画史上に残る大監督として知られていますが、残した映画の数は10本にも達しません。名声は高かったのに商業的に成功しなかったためです。この意味で彼はフランスのロベール・ブレッソンと並び「呪われた大監督」の扱いを受けています。ウェルズは、「駅馬車」を始め数百本以上の作品で知られるアメリカ映画の父たるジョン・フォードと同じくアイルランド系のアメリカ人です。実は黎明期から全盛期を迎える時期のアメリカ映画を築いたのは、アイルランドという特殊な風土が養った移民の力でもありました。

ぼくが勧めたいこの映画は、いわゆる「名画」というより、とくに最近また見たくなっている恋愛サスペンス映画です。ウェルズは当時自分が実際恋していたリタ・ヘイワースを抜擢し、しがいない流れ者の水夫が美しい女の絡む陰謀に巻き込まれる物語を、みずから主演となり、妻となる女優を用いて見事に演出していきます。実生活でも酒に溺れ身を持ち崩す女優なのですが、その妖しい魅力に自分を見失いそうなウェルズの不安感が伝わってきます。実際に映画の最後で、ウェルズはすべてを失う

と同時に迷いから覚めて自由の身となるのですが、果たしてそれは予感だったのか……

アメリカ映画でずっと流行してきた裁判の場面もさることながら、圧巻は最後のサン・フランシスコの中華街から滑り台で迷宮をさまよう場面（多分ドイツの映画監督ヴィム・ヴェンダースが「ハメット」で引用した箇所）です。割れる鏡で倍増する男と女の姿、あるいは水族館に大きくのびる影など、ウェルズの実験的な映像が素晴らしい効果を発揮します。ウェルズの磁力的な映像に、すでに小津安二郎はチャップリンどころではない評価を与えていたと言います。

1948年で、白黒のこんな映画を薦めるというのも古めかしい、と思われるかもしれませんが、面白いんだから仕方ありません。「白黒映画は素晴らしい」、「役者の演技に視線が集中する」といったのも、ほかならぬウェルズでした（彼のカラー映画は最後の一本だけ）。映画館で見るのが一番ですが、こんな名作がDVDで手に入るよう

（丸川誠司）

第11号は10月31日発行の予定です。